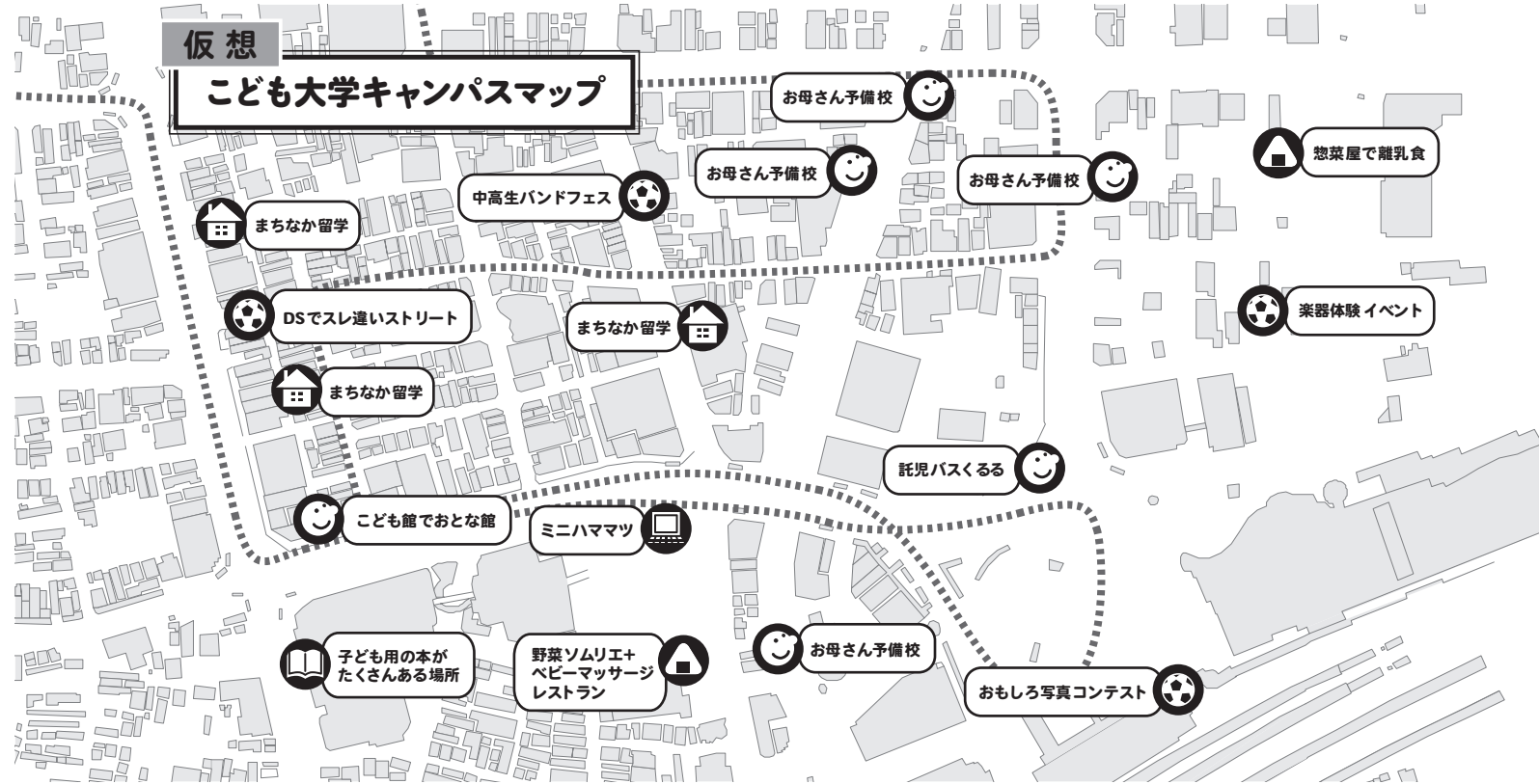


<仮想キャンパスマップ>

今あるまちなかに、空きスペースなどを活用しながら5つの学部を設け、「浜松市循環バスくるる」を親子で乗れる「子育てバス」として運用し、各学部をつなぐ提案です。くるるのルートに沿って、子育て支援機能は発達し、バス停は各エリアの子育てスポットになります。

もし、 浜松のまちなかが 大人も子どもも学べる こども大学 になったら?!

もし、浜松のまちなかが大人も子どもも学べるこども大学になったら、まちはどう変わっていくだろう。まちなかにいけば、子育てにまつわる苦労や悩みが晴れる。子育ての授業が受けられる。子どもにも安心して食べさせられる自然食品食堂がある。今あるまちなか全体を一つのキャンパスに見立てて、親子も子どももまちなかから学ぶ、そんな子育てのまちのストーリーを紹介します。
※本企画内の提案事項は架空のものであり、実際の場所団体とは関係ありません



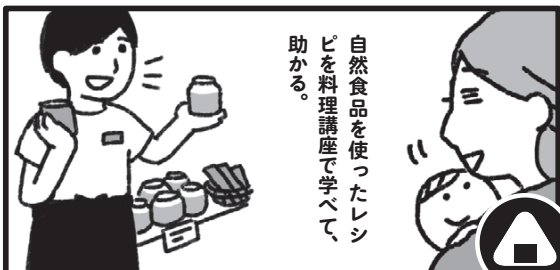
- あそび学部**
まちなかで社会を体験しながら遊べる、「遊び」を「学ぶ」多世代向け学部。
- 食学部**
食育講座、自然食品レストラン、人にも地球にもやさしいライフスタイルを勉強できる。
- 子育て環境学部**
お母さん、お父さんのための育児教育、託児環境の整備を進める総合学部。
- こども図書館**
こども用の絵本から子育てに関する知識までを扱う図書館。お洒落なカフェが併設され、高校生の自習室としても人気。
- くらし学部**
子育てにまつわる生活の質を向上させるための講座やワークショップが行われる。
- いびと学部**
正しいことを選び方や、地元浜松の優良企業の紹介を通して、子どもが育っていくそれぞれの過程で「こと」について考える学部。

子育てゼロ期



今の子育て

こども大学ができたら!



特集
もし、浜松のまちなかが
大人も子どもも学べる
「こども大学」になったら？

未就学児

子どもを連れて気軽に
外食にいける場所がな
かなかないのよね。

子どもを遊ばせる場
所があるのはいいけ
ど、その間自分が待っ
ているだけというの
ももったいない。

子どもを遊ばせる場
所があるのはいいけ
ど、その間自分が待っ
ているだけというの
ももったいない。

今の子育て

友達が皆ゲーム持っ
てるから買って買っ
てあげたら気がつい
たらゲームばかり。

いろんなしごとを子
どもが知れるチャン
スがまちにあるとい
いな。

子どもだけでも安
心して遊ばせられる
場所がないかしら。

こども大学の食堂でも
あるこの自然食品レ
スラン、自分以外にも
子連れで来ている人
が多いから、入りやすい。

託児スペース付きの
お店が増えて、若い
学生も面倒を見てく
れるから安心。

託児スペースのすぐ
隣にお洒落な雑貨屋
さんがあるって子ど
もを見ながらお買物。

こども大学ができたら！

あそび学部で地域の
人が昔の遊びを教え
てくれる。とっても
文化的。

こども大学のしごと
学部が運営する「ミ
ニママツ」。まちな
か子どもだけの社会
を体験できるイベ
ントがあるなんて
素敵。

商店街の路面空室が
こども大学が運営す
る学童保育になっ
て、商店街の人たち
が見守ってくれてい
て気兼ねなく遊ば
せられる。

中学生

中学生にもなってま
だゲーム以外の遊び
を知らないなんて。教
えようにもわからない
し。

あの子ったら部活が
忙し過ぎて学校に閉
こもってばかり。

同級生以外の知り合
いが増えれば、いい
経験になるのになあ。

今の子育て

一日中パソコンと携
帯にばかりついて、
そんなにつながら
ないのかしら。

あの子ったらまた自
転車でイチジャ行っ
てくるって、あそこ
にいったら誰かに会
えるそうだけど...

高校の息子の進路相
談のってあげたいけ
ど、大学しか進めら
れないし、偏差値で
しかアドバンスでき
ないわ。

高校生・大学生

しごと学部のプログラ
ムでまちづくりイベ
ントのお手伝いがある
そう。知り合いも増
えるし社会も知れて、
良い経験になりそう
ね。

こども大学の施設に
運動できる場所もあ
って、週に一度はま
ちなかで部活できるん
ていいじゃない。

くらし学部は地元と協
力して地域のお祭り
をPRしているそう。
子どもが参加できる
機会が増えれば、同
級生以外の知り合い
も増えるわね。

こども大学ができたら！

まちなかのあそび学
部には空き室を改修
したスタジオがあ
って、よく使ってる
わ。

新しくリニューアルし
たこども図書館、予
備校にいくのもいい
けど、お洒落なここ
で習ったりおしゃべ
りするのいい大人に
なる経験として大切
ね。

浜松の優良企業を行
脚するツアーがこども
大学のキャリアに
あるそうよ。最終的
に地元に戻ってきた
ら安心だね。



まちなかの
遊び場を
つくる



楽しい子育て 学べる子育て

浜松まちなかにぎわい協議会では、子育てとまちづくりをテーマにして今年度から事業の方向性を探っています。今回は、私たちの活動に専門家として携わって頂いている浜松学院大学准教授の名倉一美さんに、にぎわい協議会での意見交換ワークショップ、子育て支援の現状、まちなかへの思いを中心にお話を伺いました。

(聞き手/メディアプロジェクトアンテナ/辻琢磨)

か大きなことをやる、そういうごっこ遊びに関心があります。協同的な学び、遊びがキーワードですね。

にぎわい協議会に触れてみて感じたこと

辻 先生にはにぎわい協議会での子育てに関する意見交換ワークショップに、子育ての専門家の一人として三ヶ月間参加して頂いて、まちなかの見方も多少なりとも変わったかと思えます。実際に参加してみて、いかがでしたか。

名倉 個人的には本当に面白かったです。私は袋井出身なので、浜松のまちなかに憧れていた時代から今だんだんと人が集まらなくなってきた状況をちょっとずつは見ていて、問題意識をはっきり持ってみると、なんでこうなったんだろうと考えさせられました。

辻 意見交換ワークショップの中で妄想的にこうなったらいいというアイデア集めがありました。その中で気になったものはありますか。

名倉 自分の楽のためにはお金を使うことに抵抗があってもお金を落とさないが、子どものためなら惜しみなく出資するという価値観がお母さんたちにあるという意見にはなるほどなど。そういう意味で、お母さんたちにとって必要なもの、例えば食育など、子どものためにという部分があつたりしている一大施設がまちなかにできると有り難いなど。個人的に

は子ども館のあるザシティ自体が上から下まで子どもにも特化した施設になってしまえば、インパクトがあるのかなと思います。

あとはお母さんための子育て支援大学。社会人向けの大学は生涯学習でも広がっているの、そういった発想の大人向けの講座はありだなど。勉強したい、学びたいという人が多いので、継続的にブラーディングしていけば形になっていくのではないのでしょうか。

ミニミュンヘンからミニハマッツへ

辻 いろいろなアイデアの中で名倉先生が挙げられた、ドイツでの社会体験プログラム「ミニミュンヘン」についてもお聞かせください。

名倉 ミニミュンヘンはミュンヘン市がオリンピックスタジアムを貸し切つて、二年に一度、三週間、子どもだけの社会をつくるというものです。銀行からハローワーク、何もかも子どもたちがつくて、大学もあれば、市議会、選挙、警察、家も自分たちで作る。この中で子どもたちが働きながら学ぶ。これは小学校以上が対象ですが、先ほどの幼稚園・保育園のごっこ遊びの発展版ですね。

辻 具体的にはどういった部分に興味をもたれているのでしょうか。

名倉 子どもたちが主体的に自分たちで考えて、協力して何か作っていく、そ

いきいきと遊べる環境づくり

辻 まずは名倉先生の簡単な自己紹介からお願い致します。

名倉 今は浜松学院大学で幼稚園、保育園の先生を目指す学生の保育者養成を担当する教員として活動しています。出身が袋井で、もともとは群馬大学で障害児教育を勉強していたのですが、そこで保育の奥深さに目覚め、後、県西部地区浅羽町の公立幼稚園、行政教育委員会でも働きました。その時に発達障害のお子さんの支援の必要性を感じたので、退職してから静岡大学院に進み、その後一年間民営の保育所で働いてから現職に就きました。

辻 どういった経緯で今の研究職の道が見えてきたのでしょうか。

名倉 本日は大学院進学の時、障害のある子どもたちの支援ということを考えていたのですが、障害をもった子どもの支援というものは本来的には子育てや生活のほとんどすべてが関係しているということがわかってきて、一緒に生活する子どもたちを含めた全般的な保育そのものをよくしていかないといけないんじゃないかと思ったり、そのまま保育の研究の道に進んでいくという。

辻 そのような活動に至る問題意識は具体的にどのようなところから生まれているのでしょうか。

名倉 最近思うのは、それぞれ一人一人

れをものすごく楽しんでやっているところに惹かれて。プログラム全体が大人の社会の縮図になっていて、労働者のデモや、裁判なんかもある。お金も労働したら稼げて、税金で数パーセント取られるというような仕組みもあるんです。こういった仕組み作りの中で、子どもにどこまで任せるのかということがポイントかなど。幼稚園、保育園での保育も、幼児期は自分が楽しいと思うことに取り組みせる時期なので、主体性が求められる。

辻 これからどういった活動をされていきたいですか。

名倉 まちなかで、「ミニハマッツ」のスタートアップ版を年度末くらいにゼミ

が持っている可能性を伸ばしていけるような、支援というより、皆がより楽しくなるような、前を向いている場が必要なんじゃないかなということ。今、特に関心があるのは、個と集団との関係です。一人一人が生き生きすると集団全体が生き生きするし、集団全体が生き生きすると一人一人が生き生きするというバランスのとれた関係性づくりはどうやっていけばいいんだろうという。

辻 それは教育という分野を超えたテーマですね。まちづくりでも個と集団との関係がテーマになる。

名倉 そうですね。最近はい「ごっこ遊び」にも関心があります。単純なお母さんごっこというよりも、最終的に皆で役割分担をして自分たちで目的を持って、何



(1) 名倉先生の授業の様子。子どもが自由に遊ぶ環境づくりの研究。

生とやろうという話が進んでいます。ゆくゆくは、市やまちなかの皆さんと連携して継続的に出来れば良いかなと。

辻 テーマが公共的なので、まちなかの方々も協力しやすいんじゃないかなと思います。最後に、理想のまちなか像を教えてください。

名倉 ありきたりかもしれないですが、子どもも大人も笑顔で楽しめる街。都会ならではの良さ、情報や文化、教養が街に行くといっぱいあるとなると素敵かなと。そういう風にして浜松のまちなかが教養豊かな場所になると素敵なんじゃないかなと思います。



名倉 一美(なぐら かずみ)

群馬大学教育学部卒業後、浅羽町立幼稚園や浅羽町教育委員会学校教育課に勤務。その後、静岡大学院教育学研究科へ進学。在学中に、地域子育て支援センター臨時職員、地域療育支援センター、保育士などを経験。修士課程修了後に、一年間保育所の保育士を経て現職。